

巻 頭 言

「天平文化に学ぶ独自性への模索」

今年の5月下旬の週末、学会で久々に奈良を訪れる機会を得ました。目に優しい新緑の緩やかな山々に囲まれた奈良の地は、神仏が宿る神社仏閣も多く、今年度からの新しく慣れない仕事で慌ただしい日々を送っていた私にとって、パワースポットとしての御利益を得るとともに、つかの間の心の癒しとなりました。そして、「美しいものを見て目を肥やすのは環境デザイン学科に身を置く者の務め！」と半ば言い訳的なことも考えながら、セッションの合間を縫い、先人の残した造形物を時間の許す限り見学してきました。

中学の修学旅行以来となる興福寺では、「阿修羅 天平乾漆群像展」が開催されていました。今回の仮講堂での公開では、これまで国宝館に一列に並んでいた仏像たちが、約1300年前の姿を彷彿とさせる本来の配置で阿弥陀如来の周りを守るように取り囲んでいました。後日テレビで本展覧会の特集を見て、この配置が釈迦集会像こんくという名称であることを知りましたが、左右に据えられた一対の金鼓こんくと呼ばれる楽器はその音色により罪と業を消し去るとされ、釈迦の十大弟子や釈迦の教えに帰依した神々である八部衆立像の、感覚を耳に集中し心の中に目を向けているような微妙な表情からは、当時の匠たちの仏像製作の技術水準の高さを感じました。中でも734年に作られた、すらりとした6本の長い腕と3つの頭を持つ国宝の阿修羅像は、戦いの神でありながら、華奢な青年のような面持ちで本当に美しく、目を奪われました。左面：険しさ（戦いの神である阿修羅の本性）→ 右面：悔しさ（過去の悪行を悔い改める）→ 正面：内省（戦いをやめ仏に帰依した）という、心境の変化を段階的に表現したという3つの面。写実的ながら生々しすぎない、抑え気味の日本的な美の表現が実に心に響き、最高傑作のひとつとされているのも納得がいきます。これらの微妙な心理描写には、当時の技法である脱活乾漆【粘土で原型を作り、麻布で表面を固めた後に粘土を抜き取り、その上に木の粉を漆に混ぜたパテのような木屎漆こくそうしで肉付けする技法】が重要な役割を果たしていたと考えられ、それぞれの時代の美がその時代の人の感性だけでなく技術とも強く結びついているのだと改めて気づかされました。

平城遷都から平安遷都までの天平の時代は、その前の中国や朝鮮の文化を受け入れ模倣した白鳳時代とは異なり、「日本とは何か」を考え、唐からもたらされた仏教の経典や定型化された仏像を、日本ならではの感性で表現しているといえます。本学は「昭和ならではの」のキャッチフレーズで本学独自の教育の特色をPRしてきましたが、環境デザイン学科でも、「環境ならではの」を明確に示せる「環境デザイン学科の目指す教育とは何か」ということを改めて考える毎日です。優れたデザインには「美しさ」「機能性」の他に、「独自性」が絶対的に必要とされます。他にない独特なものを求めて、デザイナーは日々アイデアを模索するのです。本学環境デザイン学科の教育にも、うちならではの「独自性」を確立すべく、各人がその感性を大事にしつつ学科の未来について考えることを続けたいと思っています。

本紀要には、環境デザイン学科に所属している教員の研究成果として研究論文2報、デザインノート2報を掲載しております。昨年度実施した4名（教員2名、助手2名）の学術研究会のサマリーも示しました。昨年度、本学科では193名の学生が、それぞれの進路に向かって学び舎を巣立っていきました。その卒業生全員の卒業研究のテーマを巻末に記載しています。また本学科の特徴的なカリキュラムのひとつである平成29年度のデザイン計画特講の講師一覧も掲載しておりますので、併せてご覧いただければ幸いです。（環境デザイン学科長 石垣理子）